

プカイ村訪問記

北タイ・赤ラフ族における2つの祭祀方式

西本 陽一

筆者は2013年03月16日に、北タイ・赤ラフ族の一村を訪ねた。これはその記録である。

チェンライ県ムアン郡バーンドゥ区第13村プカイ村
郵便番号 57100
海拔高度 588メートル(デジタルカメラのGPSによる)
2013年03月16日訪問

1. 村の概況

プカイ村は赤ラフ(ラフニ)族の村で、2002年のサーベイによると、48世帯、59家族、228人(男性78、女性74、男子児童34、女子児童42)が居住している(タイ国、社会発展と人間の安全保障省社会開発と福祉局2002)。同サーベイによると、2002年時点では「国家保全林内」(タイプ2)にある村であるが、その後、村を含む地域は国立公園に指定されたという。そのため、焼畑耕作をおこなうことができず、住民はチェンライなどの町での賃金労働を主な生業としている(写真1、2)。

村の東側は観光局の土地だ。村人は、村の下の方にむかし持っていた水田を売ってしまった。そこにはバンコクなどの人が、別荘を建てている。(データ5)(写真3)

村は70世帯ほどだ。

村には、ムヌ(キリスト教徒ラフ人のこと)が婚入して住んでいる。アジャ(村牧師)、ボイエハシャパ(教会管理者)が、日曜日ごとにやって来る。

今日は賃労の仕事がないので、村にいる。あれば行ってやる。耕地がない。パーマイ(森林局)がいて(焼畑が)できない。焼畑地はたくさんあるが(禁止されて)できない。焼くこともできない。それでコロ(北タイ人)のところに賃労に行くのだ。ラフヤ(ラフ人)はきついね。ホイェ(赤ラフ族伝統宗教の神殿)も(古いも



写真1 プカイ村の様子。
(以下写真は全て筆者が2013年03月16日に撮影したもの)



写真2 プカイ村の様子。



写真3 プカイ村へ到る道。リゾートなどの看板も見える。

のを)壊してから、まだ再建していない。(データ1)

(村の私たちは)賃労ばかりしている。仕事があれば出かけて行き、なければ村に残っている。若者には、町に住んで(賃労して)いる者もいる。

賃労はゴーサン(現場仕事)など、何でもやる。耕地がないから、賃労ばかりしている。パーマイ(森林局)がいるから、水田を拓くこともできない。

蜜蜂 *peh' ha'* (蜂の子のことか) を売っている。バンドウ(チェンライ市街から8キロほど北上した町)で売れば200、時々300バーツになることもある。今年は花が咲かず、それでペ(蜂)もいない。なぜ花が咲かないかは分からない。(データ4)

2. 祭祀

村の住民は、個人で見れば、他の下位集団属性を持っていたり、他の下位集団出身の者もいるが、村全体としては「赤ラフ」(ラフニ)を自称している。村の祭祀も赤ラフ族の祭祀のやり方を取っている。

ラフ族の伝統的な祭祀は、「ペトウシャトウ」(蠟燭を点し線香を点す *peh' tu' sha tu'*) という連句で表現されるように、蠟燭と線香を点すことを実践の中心としている。しかし、実際には、北タイの赤ラフ族の間では、線香を用いることはほとんどなく、蠟燭のみを点すことが一般的である。これは中国雲南地方の黒ラフ族の多くが、結婚式など一部の祭祀のみで蠟燭を併用するが、線香を点すことを実践の中心としていることと対照的である。

<線香><蠟燭><祭祀の流儀>(データ1)

シャ(線香)は、本当の赤ラフは、点さない *La' Hu- Nyi' teh, teh, k'o, ma' tu'*。コロ(北タイ人)は点すけど *Kaw' Law' ma' he' k'o*。ラフはペホ(蠟燭)だけ入れる(供える)。ペホ(蠟燭)だけ。

北タイ赤ラフ族の一般に漏れず、プカイ村でもシェコヴェ *(sheh' kaw- ve)* とサラテヴェ *(sha' la te ve)* という年中祭祀を行っている(写真4)。赤ラフ族の多くの村で新暦4月半ばの満月日を中心におこなわれるシェコ祭祀の目的のひとつは、焼畑開拓時にやむを



写真4 プカイ村のサラテヴェ祭祀で作られた涼亭。村へいたる道の脇に作られ、道行く人が休めるようにという儀礼的な目的をもつ。

得ずに畑の虫たちを殺してしまった罪を「捨てさる」*ba. ve* ことである。プカイ村のシェコヴェは、少なくともその儀礼過程の一部は、カウパ *hk'a' u' pa-* と呼ばれる、村祭祀のための祠(後述)のもとでおこなわれる。

<シェコヴェ><サラテヴェ>(データ1)

シェコ祭祀の時には(カウパのすぐ)下でやる。女も幼児を抱えて、みんな出かける。ここ(カウパのすぐ下)一カ所だけだ。プケ *(元村長である長老の名前)*の家ではやらない。

そこの、外 *a' k'a* 一カ所で捨てる。悪いもの *ma' da ma' na ve*、プムホーナ(虫たち)を唱えて、捨てさる *hkao- ba. ve*。夫婦の間の悪いものを、言葉を唱えて捨てさる *aw. pa. aw. mi' ma ma' da. ve, hkao- ba. ve*。

シェコ祭祀の後、サラテヴェ祭祀をする。道の脇に(サラ、つまり涼亭は)作る。ジャティサラ *ca. ti sha' la'* と言う。

世帯祭祀の面では、世帯ごとに家の祭壇がある。プケ老の家の祭壇を見せてもらったが、筆者がこれまで見た北タイ・赤ラフ族の家の祭壇と違うところはなかった。家の祭壇は、寝室の奥に作られていた。垂直の棒の上に水平に板を載せて祭壇が作られていた。祭壇の下にはブロックがひとつ置かれ、その上には、竹の棒を束ねた儀礼具(オツ *aw. tsuh*、と通常呼ばれる)があり、蠟燭を点した跡があった。上方の祭壇の上には、竹で編んだ容器(オブ *aw. hpeu*、と通常呼ばれる)があり、その横には陶器と木の小さな杯がひとつずつ置かれていた。祭壇の上にも蠟燭を点した跡がいくつ



写真5 寝室奥に作られたプケェ老の家の祭壇。



写真7 プカイ村のホイェ再建のための更地。



写真6 プケェ老の家の祭壇。上方の祭壇部分。



写真8 プカイ村のホイェ再建予定地の横にあるトボの家。訪問時にトボは留守だった。

もあった（写真5、6）。プケェ夫人は歳をとって目が見えずに、家で横になっていた。彼女によれば、戒日 (shin⁻nyi) には家の祭壇にご飯と白米を捧げるが、水は捧げないという。北タイ・赤ラフ族の間では、通常、戒日に家の祭壇に供するのはご飯と水であり、白米は捧げない。この点については聞き取りの際に再度聞いたが、プケェ夫人の答えは変わらなかった。

3. カウパとホイェ

北タイ・赤ラフ族の村落祭祀では、村の中にホイェ haw⁻ yeh⁻ と呼ばれる神殿があり、トボ to bo と呼ばれる常住の職能者が村を代表して、村の安寧と繁栄のためにホイェにおいて、神 (G⁻ui sha) に対して祭祀をおこなうところが大部分である。一方で、北タイ・赤ラフ族の一部には、トボとホイェによる共同体祭祀のやり方をとらず、村の上方の藪の中に作られたカウパ (hk⁻a⁻ u⁻ pa⁻、一部の村では「ジョム」cao, meun⁻ と呼ばれる) と呼ばれる、「山の精霊」hk⁻aw ne⁻ や単に「偉

大な精霊」ne⁻ lon⁻ と呼ばれる村の守護精霊に対して共同体のための祭祀をおこなうところもある（西本2008）。

プカイ村の村落祭祀で特徴的なのは、ホイェによる祭祀とカウパによる祭祀の両方が存在する点である。北タイ・赤ラフ族の村ではふつう、2つの祭祀のやり方のうちどちらか一方を用いている。後に挙げたデータから分かるとおり、プカイ村では村全体がホイェとカウパの両方の祭祀方法を用いているわけではなく、村の中に考えを異にする2つの集団があり、それぞれが自分のやり方を主張し、おこなっている。その一方で、一般の村人たちは、状況に合わせてホイェとカウパの祭祀を折衷的に用いている。

2つの祭祀のやり方を用いる人のいるプカイ村であるが、ホイェの方は、古くなったホイェを取り壊した後、新しいホイェをまだ再建できずにいるとで、カウパのみが存在していた。新しいホイェは、北タイ・赤ラフ族の間ではよく見られることであるが、トボの家のすぐ隣に作られる予定で、その場所は更地になっ



写真9 プカイ村のカウパ。タイの土地神の祠が、ラフの祠とともに置かれている。



写真11 プカイ村のカウパ。蠟燭と白米が供えられた跡が残っていた。



写真10 プカイ村のカウパ。真っ直ぐに立った木の下に建てられている。



写真12 プカイ村のカウパ。タイ族の土地神の祠が使われている。

ていた(写真7、8)。

一方、カウパ祠はふたつ存在したが、これはふつう見られないことである。カウパ祠のひとつはタイ式の土地神の祠で、タイ人の家でよく見られるタイプのもので、セメントで作られた白っぽい色の祠だった。近くにいたラフ族住民(女性、40歳代?)は、北タイ訛りのタイ語で「ジャオティ」^{เจ้าตี่}と呼んだ。「土地の主」という意味である。このタイ式の土地神の祠は、かつて誰かが自分の家で要らなくなったものをそこに置いたものだということだった(ラフ族住民、女性、

40歳代?)。

もう一つのカウパ祠は、近くにいたラフ族住民(女性、40歳代?)が、「本当のラフのもの」と呼んだもので、北タイの土地神の祠の横に建てられていた。北タイ・赤ラフ族の間でよく見られるように、このカウパ祠も、真っ直ぐに立った木の下に立っていた。木とトタン屋根で作られており、通常のカウパ祠と違って、村の中心より上方に建てられているものの、村の外れの藪の中でなく、村を通る道路の脇のやや高くなったところに作られていた(写真9~13)。両方のカウパ



写真 13 プカイ村のタイ式カウパ。蠟燭と白米が供えられた跡が残っていた。

祠ともに、蠟燭と白米とが捧げられた跡が残っていた。
(データ 2)

<カウパ><ホイエ><蠟燭><白米><言葉>
><祭祀の流儀> (データ 1)

(村には) ホイエもカウパもある。カウパを用いる者はカウパを用い、ホイエを用いる者はホイエを用いる。

(カウパの) ハシャパ (ha. sha⁻ pa⁻、管理者) は、
プケエ (Pu. Hkch.) (という者) がやっている。

(カウパには、蠟燭を点すのではなく) 蠟燭を入れて (供して)、白米を入れて (供して)、言葉を唱える。

プケエはモーパ (maw⁻ pa⁻、呪医) もやっている。
プケエが (カウパで) 言葉を唱える。

(カウパの管理者は) プケエひとりだ。歳をとったので、年少者にやらせたいが、年少者で引き受けることのできる者がいない。

カウパテパ (hk'a⁻ u⁻ te hpa⁻、カウパ祭祀をする者) は多い。ホイエテパ (haw⁻ yeh. te hpa⁻、ホイエ祭祀をする者) はホイエ祭祀をやっている。私は、時には、ホイエ祭祀もやる。(カウパ祭祀とホイエ祭祀の) 2つともやる。1つをやってもうまくいかないと別のものをする。

<生業><賃労><ホイエ> (データ 1)

(住民の生活が苦しいので) ホイエも壊してから、まだ再建していない。

<カウパ> (データ 1)

(2つある) カウパの白いのは、昔置いたものだ。白いのは「本当のラフのものではない」
La⁻ Hu⁻ teh. teh. ve ma⁻ he⁻。ラフのはその横のものだ。

木とブリキのやつだ。

<カウパ><大戒> (データ 1)

年に (カウパに蠟燭を) 入れる (供する) のは大戒 shin⁻ lon⁻ の時だけだ。新年、シェコ、オヴェ aw. ve のときに入れる (供える)。3 回だ。カオヴェ hkao. ve の時もだ。4 回だ。

シニ (shin⁻ nyi⁻、日) は満月と新月だ。大戒 shin⁻ lon⁻ で、2 日戒を過ごすときでなければ (カウパに蠟燭は) 入れない (供えない) 2 shin⁻ cheh⁻ hta⁻ ma⁻ he⁻ k'o, ma⁻ keu⁻。

シェコの時は 2 日戒 2 shin⁻ だ。玉蜀黍を植えてシャマ玉蜀黍を捧げる時 (カオヴェ祭祀のこと) にも 2 日戒 2 shin⁻ だ。そしてジャヌ (稲穂) を供する時 (オヴェ祭祀のこと) にも 2 日戒 2 shin⁻ だ。3 回だ。新年を入れると、4 回だ。

そういう時には、村の家全部があそこ (プケエ老の家) に蠟燭を入れて (供して)、白米を少し入れて (供して)、プケエがそれをもって (カウパまで) 登る。(各世帯がプケエの家に) 蠟燭と白米を少しずつ入れる。彼 (プケエ) がそれを一緒にして、(カウパに) もってゆく。そしてカウパに捧げる。そして帰ってくる。彼じゃないと (言葉を) 唱えられない。

<カウパ><病気><禁忌><供物> (データ 1)

人が病気の時にも、カウパに蠟燭や、あれば白米を捧げる。鶏や豚は、彼 (管理者) が豚の頭を捧げよと言え捧げることもある。でなければ、豚、豚肉は捧げない。捧げて、言葉を唱え終わると、食べるのだ。分けず、唱え手ひとりで食べる。酒は捧げない。

<カウパ><ネ><祭祀の対象> (データ 1)

(カウパはネか?) 人間がいろいろ間違いをしたら、蠟燭を入れて (供して)、(祈りの言葉を) 唱えるところだ。そして、人間皆をよく守ってくださいと言うのだ。(グシャカネかと言えば) ネと言うだろう。ネロー (ne⁻ lon⁻、偉大なネ) だ。

<ホイエ><グシャ><祭祀の対象> (データ 1)

ホイエでは、蠟燭を点し、コタ (hkaw⁻ tan⁻、奉納物) を作って捧げる。コタを作り、オツ (小さな竹の棒を束ねた儀礼具) を作り、蠟燭を点して、(祈りの言葉を) 唱える hkao. ve law, G'ui. sha hkao. pi⁻ ve, o⁻ ve law (グシャに向かって唱えるのだ、ホイエは)。ネでない。グシャだ。

<カウパ><ネ><祭祀の対象> (データ 1)

カウパはネだ。

<ホイェ><祭祀の内容> (データ1)

(ホイェは) 人間に障らないでください、人間は知らないのですからと言って、コタ(奉納物)を捧げて、言葉を唱える hkao- pĩ ve。人間に障らず、人間を守ってくれるようにと言う ha, sha- lã。

<カウパ><ホイェ><祭祀の流儀> (データ1)

他の赤ラフ(ラフニ)では、カウ(カウパ)をしないところも多い。ないところはないし、あるところはある。赤ラフ(ラフニ)だと、あるところが多い。ないところはない。ホイェがあると、カウパを用いないという。ホイェに頼る者たちは、カウパに(供物を)入れない。私たちだと、入れるべきなので、入れる。トボたちは、こちら(カウパ)には入れない。ホイェだけする。ホイェだけで、祭祀する shã ve。

4. カウパの管理者への聞き取り

筆者は、村の創設者であり、カウパの管理者であるプケェ老(男性、自称50～60歳)に話を聞いた(写真14)。プカイ村(บ้านปู่ baan puu hkai)という村名は、



写真14 プカイ村の創設者であり、カウパの管理者であるプケェ老。

プケェ老の名前 Pu- Hkeh- のタイ語化したものである。つまり、ラフ族の村で時々見られるように、村の創設者であるプケェ老の名前を村名に冠しているのである。プケェ老は耳が遠くなっており、大声で話したものの、聞き取りは難航した。分かったことをまとめると次のようになる。

北タイ・赤ラフ族のカウパは村落の安寧と繁栄をつかさどる守護精霊で、タイ系民族の村落守護精霊ピースアバーンผีเสื้อบ้าน に相当するような存在である。

北タイ・赤ラフ族のカウパ祭祀は、東南アジアで広く見られる founders' cults のひとつだといえる。Founders' cult では、人々が森や荒野を拓いて村を新しく作る際に、まず土地の主である精霊への祭祀をおこない、土地使用についての許しを得る。最初の祭祀の後で土地の主である精霊は、新しく作られた村の守護精霊となる。狩りで得られた肉獣の、太ももなどの部位を捧げられることの多い祭司が、村創設以後、村落の守護精霊に対して定期的に祭祀をおこなう役割をになう。住民たちが祭祀をおこなう代わりに、守護精霊は村に安寧と繁栄とを保証する。村落の守護精霊に対する祭祀をおこなう司祭は、世襲されることが多い (Tannenbaum and Kammerer eds. 2003)。

プカイ村のプケェ老は、村の創設者であり、村を代表してカウパに対する祭祀を行う者である。プケェ老は、カウパの管理者であると同時に、呪医として活動することもある。呪医の活動は、カウパ祭祀と両立するものである。一方で、村には、トボとホイェを中心としたもうひとつの祭祀の流儀がある。プケェ老は、このもう一つの祭祀の流儀を、カウパによる祭祀のやり方と相容れないものと認識し、参加しない。

プカイ老によれば、村があればカウパは必ずあるべきものである。村を新しく作る日に、まずカウパ祠を作って祭祀をおこなう。村の家々を作り始めるのはその後のことである。

<カウパ><ホイェ> (データ4)

俺は村の創設者だ。カシェをしている。

歳は50～60歳になる。昔植えた木々もこんなに大きくなっている(と、近くの木々を指した)。

俺は、カウパのハシャパ(管理者)をしている。トボ(司祭)とは違う。俺はカシェ(hk'ã sheh-, 「村の主」という意味のラフ語。通常は村の指導者を意味する)だ。俺が(この村を)作った。ジャ

ウー Ca, U を作った(ジャウーの意味は不明?)。(それは)一村全体のものだ(村全体を司るものだ、という意味)。「カウパ」hk'a' u' pa- と呼ぶ。

(カウパは)村を作ったその日に、家々を建てる前に、先に作るものだ。カウパを作ってから、その後で、家を作り始める。

(カウパには)蠟燭は点さない。入れる keu ve だけだ(供えるだけだ、という意味)。点さない。

オヒ aw, hi, (慣習、しきたり)がそうなっているからね。あれ(カウパ)を作った後に、家やいろいろなものを作る。焼畑を開き、山焼きする heh htu' heh hpaw' k'ai ve。

一年に5回、俺が行って(カウパのところで)(祈りの言葉を)唱える hkao- pi' ve。節目節目に、(年に)5回やる aw, yan' aw, yan' 5 paw'。

シャマタ (sha ma' tan', トウモロコシを捧げる祭祀、カオヴェとも呼ばれる)の時、シャラテヴェ (sha' la te ve、涼亭を作る祭祀)、シェコヴェ she' kaw- ve、正月 hk'aw, ca' ve。食新米祭 ca, suh' ca' ve の時にも。(祈りの)言葉を唱える aw, hkaw' hkao- pi' ve。

(村には)ホイエもあるが、ホイエは(カウパとは)別のものだ。俺はホイエ(の祭祀)はやらない。ホイエとカウパは違う。カウパとホイエは違う。ホイエはホイエで別。ホイエも村を司る (ha, sha' ve) もの。ホイエはホイエで、彼らにはトボがいる。アド a daw' がいる。アジャ a ca、ラシヨ la shaw- がいる(いずれも村の宗教職)。

カウパは、ホイエより先に作った。ホイエは後で作ったものだ。ホイエを作ってからまだ4~5年ぐらいだろう。

(ホイエを作ったのは)他人に教えられてのことだ。オナムミ (aw, na mvuh' mi', 「北の国」という意味、ここではミャンマーを指す)のトボが(作るようにと)教えたからだ。トボがこうしろあしろと教えたからだ。トボ、ボク paw hku' (赤ラフ族の宗教指導者の役職名)が教えて、それを(村の人たちが)受入れたのだ。蠟燭をこれぐらいの太さに集めて(束ねて)、蠟燭をペアにして、ホイエに捧げる tan' ve。人々が病気だと chaw na, chaw g'aw, ve k'o、ホイエで浄化儀礼をする(パッケヴェ pa' keh ve と呼ばれる浄化儀礼がトボを中心とした一派によっておこなわれているということ)。

(ホイエは)昔にもあった。昔にあったが、(後に)やらなくなり、再び始めたのだそうだ。

(ホイエは実際に)俺が小さいときにもあった。カウパもあった。2つともあった。

俺だと、チョモ (chaw maw', 「老人」「先祖」などを意味する)がやっていたとおり、どこに住んでも、カウパを置く teh ve yo..。カウパはやらないわけにはいかないものだ hk'a' u' pa- leh, ma' te ma' hpeh..。

カウパは村全体のもので、病気の人がいると、蠟燭を入れて(供して)、(祈りの言葉を)唱える(病気が)治る hkao- pi' ve k'o, na-e ve。俺が(祈りの言葉を)唱える hkao- pi' ve。村全体を司るためにあるのだ、あれは(カウパは)。

モー (maw', モーパとも呼ばれる。呪医のこと)も何人もいる。俺もモーだ。モーもいろいろなことができる。

ホイエ(の祭祀)をする者たち Haw' yeh, te hpa' は一種で、カウパ(の祭祀)をする者たち hk'a' u' te hpa' は別の一種だ。ホイエをする者はホイエのみをする。同じでない。

5. その他

以下には、村の概況や祭祀に関わる事項以外で、村人から聞いた話を「その他」として挙げておく。ひとつはラフ族の下位集団に関するデータであり、もうひとつはラフ族と日本人との関係についてのデータである。

5-1. ラフ族の下位集団

<ラフの下位集団><赤ラフ><黄ラフ><下位集団帰属の変化>(データ1)

<A>昔私はロイトウン(ドイトウン)のラバ(村)にいた。赤ラフ(ラフニ)ではない。この村は赤ラフ(ラフニ)だ。

ここには赤ラフ(ラフニ)も黄ラフ(ラフシ)もいる。

<A>私はラフニ・テヴェ(赤ラフをやっている)。でもラバの者と結婚して、ラバのようになり、その後ここに来た。

<下位集団><赤ラフ><黄ラフ><ヘガ>(1)
プケェは黄ラフ(ラフシ)だ。混住村だ。黄ラフ(ラフシ)はカウパを用いる。ヘガとラフ

シは、カウパばかり用いる。ラフシにもボヤ（キリスト教徒）でない者もいる。（チェンライ県）ポンハイのジャブ村などがある。ジャブロー村だ。

ヘガは、カウ（カウパ）をする。（ヘガは）ヘパ（漢族）ではない。オリ（慣習、しきたり、流儀）が違う。

5-2. 日本人との関係

<日本>（データ4）

俺（ブヶ老）の孫の1人はヤレ村 Ya^h Leh^h にいて、日本人と結婚した。町に家を建てたので、こないだ土曜日に行って、言葉を唱えてあげた hkao. pi^h ve. 新築式 yeh. suh^h tan^h ve だったので。日本人は帰った。戻ってくるかどうかは分からない。妻はヤレ村にいる。

6. まとめ

プカイ村は、北タイ・赤ラフ族の村落の中でも、ホイエ（神殿）とトボ（祭司）による祭祀方式とカウパ（村の上方の守護霊祠）とその管理者による祭祀方式を併せもつ村として、興味深い事例を提供している。というのは、北タイ・赤ラフ族の村落の大部分は現在では、前者が後者にとって代わり、前者による祭祀方式をとっているからである。後者による祭祀方式をとっている村でも、前者の祭祀方式を併せもつ村はほとんど見ることができない。プカイ村のホイエは現在再建中であり、再建後に同村における2つの祭祀方式がどのようにおこなわれ、2つの流派の人々がどのようにそれぞれの祭祀方式について語るかを見てゆくことで、北タイ・赤ラフ族の宗教祭司についての理解がさらに深まるものと期待される。

今回のプカイ村訪問によって、北タイ・赤ラフ族のカウパ祭祀についての新しいデータが得られた。上で示したとおり、カウパ祭祀は、東南アジアで広く見られる founders' cult のひとつと捉えることができる。これまで筆者はカウパ祭祀を主にホイエによる祭祀との比較の中で、北タイ・赤ラフ族の宗教変化の文脈の中で考察してきた（西本 2008）。この視点と矛盾するものではないが、今後は北タイ・赤ラフ族の村落開拓の事例、村の創設者でもあるカウパ管理者の特徴と役割など、もっと founders' cult の文脈の中から北タイ・赤ラフ族のカウパ祭祀を調査研究してゆく必要がある

だろう。

データ出所

1. チェンライ県ムアン区バーンドウ郡プカイ村 村にいた女性3人（30～40歳代）へのインタビュー、2013年03月16日（音声データ）
2. チェンライ県ムアン区バーンドウ郡プカイ村村のカウパを観察した際の録音メモ、2013年03月16日（音声データ）
3. チェンライ県ムアン区バーンドウ郡プカイ村 プカイ老（男性、「50～60歳」、村の創設者でカウパ管理者）へのインタビュー、2013年03月16日（音声データ）
4. チェンライ県ムアン区バーンドウ郡プカイ村 女性（40歳代?）へのインタビュー、2013年03月16日（音声データ）
5. プカイ村近くに住むタイ人（男性、48歳）による教示、2013年03月16日（野帳データ）

参考文献

- 西本陽一 2008 「伝統宗教の動態—北タイ・赤ラフ族の宗教」『金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇』28：65-172.
- Krom Kaan Phatthanaa Sangkhom lae Sawatdikaan, Krasuang Kaan Phatthanaa Sangkhom lae Khwaam Mankhong khoong Manut (タイ国、社会発展と人間の安全保障省社会開発と福祉局) 2002 Thamniap Chumchon bon Phuen thii Suung 20 Cangwat nai Pratheet Thai phor sor 2545 (英題：Highland Communities within 20 Provinces of Thailand, Bangkok：Krom Kaan Phatthanaa Sangkhom lae Sawatdikaan, Krasuang Kaan Phatthanaa Sangkhom lae Khwaam Mankhong khoong Manut.
- Tannenbaum and Kammerer eds 2003 Founders' Cults in Southeast Asia：Ancestors, Polity, and Identity. New Haven, Connecticut：Yale University Press.